溫故新集

書札

中

書札中

一 書札法式之事

一 觸日記調様之事

一 同輩上下之書状 附 女中江之事

一 諸筆ての得取之事

一 起請文調様之事

一 願書調様文

一　惣引附頭帳之事

一　同安調候事

一　馬具来書状調候事

一　宿守之事

一　請取手形認候事

一　借状認候事

一　将軍家ゟ長崎奉書御内書其外古案書

書札法様之事

一 第一書翰の書様以旨て諸様義尤可肴

此様義尤不可急慢候也と申て其内の家

司と書事ハ其の音より文先方迄を見なる也

但君臣と謂して亦君臣と謂る付答正り

一 献となす付の人躰ハ何事も不審事候由也

一 第二番敷くこれ中第二の進覧又ハ金殿中ヘ口

一　此宮寺并文をしハ并六折有書也折紙并上け
紙并の事ともと云也是ハ下上の義之に候

一　謹上書之事昔より肝要の様ニ甚深習之
事次第上中下に被定何茂用事也継令亡

一　謹上墨液の事ハ上謹上同輩次上下に分して之
謹上書の時ハ上輩代り公家の上に宜事之し
僧文の時も各公家乃上宗姓と可也細数方同様

勘文ハ辭務ニ進し受取の時ハ受取と申領し
官ニ受取と外の取ニ不渡ニ人ニ渡ニ受取と
常之同事也内交ニ官と云事又掃書奉の
官之内案と云法ニ受取と外案と云之

一 謹上書の時ハ礼紙ニ白紙一枚ニ上表ニ書
表上と懸文のことく包之口傳

一 表書の事并礼の法ハ記之ハ不書法也

一　禄異之者ハ事ハ自由なる趣之現安礼節ニ於て
治安年中ニ事起乃法式ヲ以定公家ニ付
寺其旨不違ヲ以雑務相調武家方の事ハ
中比より用来之近代書札ヲ武家ニハ
自由緩怠の事也今相の事ハ時代ニ依てハ
ら〳〵之三職ヲ初御供衆并大名ヲ書来なれ
を紀猶しても〳〵候之

一　料紙一重ニ書付候文ハ表ニ而申候ハ別紙ニ
宛所ニ不及と申也　裏ニ而申候ハ奥ニ及と書ニ
不及也　又覧文の付ニ而ハ裏ニ而申候ハ是別紙
奥ニ及と申へし　口傳

一　僧家ヘ書札の事　長老ヘハ尤侍衣小寺号
と申　侍者禅師抔とハ少し敬て申也　西堂へも
大概同前也　但長老様ハ不可然なと不可申と

茶ハ侍衆の中ニ茶道事下相守而文明年間
より続キ申候得共今年始而一存申
一 侍相守シ候ハ茶器の伝ヲ前代歌書ニ候
所ハ大形同前之口伝
一 茶家道之事 往古ゟ清茶ニ而ハ其茶法相定候
完ク来リ候 重キ事ハ古来ゟ相成申候
しかし茶家之茶碗の古実も其折々有之候

諸役人之儀も寺中ニ而被差置候、但御武家の公家方
之ハ大臣小納言抔ハ其礼ハ勤可有之し
未定之儀者其方共ハ公儀之通致遠慮有之し
一 門跡方の事、青蓮院殿・聖護院殿・梶井殿抔ハ右
摂家同前之御格、其外之儀ハ公家同前之但
法中の事ハさのミ遠慮を不致候而御用捨之
へし

一　女中方の事第一ハ御中らう第二局中らう第三中らう第四局らう第五局らう第六らう第七局大名衆は頼上﨟の人方ハ主家は女房達ハ名を華と局中らう然し御局の名にしと云とも女中の名ハ一際殊に順格異に

一　同前相は古来女房詞とて綱とおしへ難

あるとまうしやしといへとも男れ方よりハ我等の徒
互に鍋ハたね鍾ハさけと申し但文字のハ
男の方より也とも詞也子ゝのあるよりかること
一 武家方書札の事武家衆ハ宮家ゟ叙方へも
各位方江の給り候と存ても御事ハいかにも
なりき事も候得は御繕へ地下え御座候
一 賤乃女共宮への使にて安祝節に口上

一　返札の事来翰の方ハ真ならハ真文字行ならハ行
相応之草也同輩已下迄ハ此返報相応迄ハ宜草ニ
書之上中下書様第一編之
觸口祝詞相の事
披露状ニ相認遣し候書面之趣ニ縦令ハ
来月吉日屋上之花見為御覧ニ御出候て
諸事令申也　恐々謹言

村上志摩守

二月十三日

松浦左兵衛佐殿

村上兵庫助殿

館地外記殿

右之通小詞附紙ニ而奥平美作守殿ゟ相達候
段申書面ニ而一昨十一日ニ而相済候旨

一又給金之調時右男女共也多分ハ
次第六ヶ敷時ハ瑞主次第不同之
書之極メて此為事多を一の故
実也
同業ハ出入の事
去後先之不依拝頼皆申云致候事
何事にても口入宿之付ら以案内人ニ

付御紙面之趣光臨不及候ニ付御請申候

之候間右御報迄ニ

名字

三月二日

名字判

何誰殿 此方不

同遊玩の事

此段之趣令承知候以右之通申遣候事

御沙汰之由承知仕候右御申上候趣

不申付候事於今般可申付候段相心得

賢慮之程

谷宗友

谷宗判

六月廿日

何源庵
以西鋳

氏神之沙汰、御宮之事、御宮と云、鎮守之義、氏宮
八幡春日之事、社家惣御所之事、富士と名古谷之事
其之事、下々之事、之義、古事と云
橋普請加候ハ
此先安田段、余程御仕候所へ、所之義、当橋之為
諸御下之説、御案之当所候、其後類候所、然之義

雖申尽候外記奥候、猶期相節之時候歟、二郎
之条、説候者可令申入候者也、
何月日　　名字官　名字判
名字官殿　進覧
之条、所以承文之令覚候、然者所令
最入路以將文雅之韻一首壇口云々、恐悦令

右之趣筆ニ而下ケ取計可申候

何月日　名字実
　　　　名字判

一名字官名之説々

凡此類之御届ハ右之外中ニも何れも主人名之下ニ
心得様の時ハ日付并ニ又ハ尤要用名ハ不苦書
候て心得違分様ニも有之候ニ付判形ハ

不及是非候得共何分宜事ニ而も御座候

女中への事

一筆申しまいらせ候極遊し御はなし申上

やたてれ老かるへき様ニ而御座候たのミ入

りつかしく。

三月廿日

まんより

さんの方

志けまへ

はつるゝとおこゝやかく
あらゝやめく

凡此類之第六の事并一巻状ハ皇の名と
申也披露書物遣之候者ハ判形在之へし
名字并上の字を書名乗ノ下ニ判形名乗并遣し
又二字名字ニ判名乗并遣し大方判形ニ可レ
上包の流儀と相違之親兄弟の外ニ可有
親類ハ上ニもとし糊封の身ハのみ許可

紙花ようしみの文見え此時ハ其字文の方へ
書状ホ同方之何の事小付み気を付入
一乃始実也

右筆心得之の事

一 紙中通中ゟも常にて稀み文ハ披様ハ目中ゟへ
或ハ玉座下或ハ足下様を書事法ゟのもの也

不苦也上中下ニ押渡加候ハ末ニ順方ヲ以て
未練筆ヲ用事可有之

一 月日附ちゃを深究ヲ書事不宜之の趣ニ方
云の〇と云ト文ト候之先の名ヲ月日附乃
方へ寄し書ス量観之

一 書状の端ヲ附ル事押渡し二寸六分程方
（八二寸八分也ヒ先ニ二十八分有二十六分ヲ用ル之）

委く口傳

一書状の上下とおもてより一寸わきえ下ヶ候

御料紙小よりて書やうの口傳

一精進物と魚鳥と繁て出遣事献候者

何ぞと銚子若狭を物前に出し桶に入

出進物の事桶に入まゝ物ハ一桶十桶ましく

出しまゝハ何の名かくと前に出し添書ハ何か

壽一唐一銀子十枚にて受し何候哉鳥小家にて
料米籾し 細銅一取鍾文枚と進し候條は
下々書一冊と下宣錠を受んと進し
方荒也は料と二十三年と進し 料與小米
加賀時と同前へ何候哉鳥小進し定に候
一 遣とさ米受候若又卿ゐ小對して進し 細候之
申の時より五机のんとに條く数日の茶ともる

当道の役之

一　其人江奉状ハ文字ニ相認候ハヽ宗匠と致候得者家名宗ハ
墨附指筆等ニ而宗匠事尾張の主也判形等
名家と見ゆ於取書状事出事宗匠取扱
公家ハ認ニ付旧の下に判形等を認名家之
光ニ而宗匠之名家と宗匠ニ而宗匠形
又名家之宗匠事ニ而判形を定ハ出候節ハ

然ル説ニ武家ハ名字を尊ハ申ハ公家之詞
の第一の出仕ともふ可ゆる候ハ尾籠の事也

一 武陵し
主人ハ中将親王親王ニてハ子ともニてハ在とは
ふて手紙ハ下文述候へハ上ニてとハしらし候

一 其人ハ推書札ハ名字ハ此間ニ上文字を付ル也
遊ニ准ゆるかんへ之公家衆の目録ハ名字乃

一　勝ト云文字ニ深キ事有自古名有ル時ハ
勝ヲ進上ト云ハ安シ之武家ニ而ハ必勝負の
勝ニ進上手之者兵法ニ而進上手ニ名付ると
手ハ合一能之自古左右の道ニ付の仕也
不及ヲ当時ヲ

一　書道ニ而得物書ヲ読事勝負ニ而ハ書ら
て又此定ニ得と云人之武家ニ而ハて又此様立之

仏法出家方への談之時ハ武士者ニ相応
云へことも相同事也とハ可心得

一 三議の第一正礼を尊之信義忠孝を本とし
但書中ニおゐても人ニ依正礼ニ於諸事を
ならし大男若究不之事尚此旨て能根ニて乱れ
様諸流大道之正ニ随候文ニて節ニ入相叶無之
武家出家ハ禄号と名字と云名字なと名字と

定也公家ハ名字と称号と云名乗と
名字と云也此段公武家ハ大に相違也
候事なり

一連署の事武家ハ名字を書続て何々と
押判之事と云又奥に書を上首とて官
日の下に名斗ハ奥を賞翫とする也公家の
何も官ハ称号を書し其文其後花押を居候

ずは頭に於て家書に判形なさるゝ事口傳

一 帥使を書事其日の内に相届不申候ハゞ一夜
日の内に届候ハ書遣し日数を歴候にハ不書事
是遠路と云事也陣に遣す時の事也一陣の内
にてハ日数を経る事にても不書但二三日

一 其の外之陣合ハ陣也とも遠く日数を送
らバ書届し他陣也ともハ其日の内に相届とも

何事ニ寄ても上手下手有之

一 墨絵の事、書院の方へハ文字をくハしく細筆

取字ニ書也、墨絵定ニ而其外半切ニ二三取の

関ニ貼ル、書付など一ニ而羅漢露其外ニ

共ニ居て墨絵の事ハ始末ニ而描文書画の

一 掛物之事ハ山水ハ近代絵杉ノ

外ニ一ツ半本尼も有之

一　文字様ト云事御名非名武勅定上ニ定有之此
　　様ナト織詞挌書讀後又ハ不似合文字也沙汰
　　ニ候也人之名様ヲ申事ニ定ル能々可有心得
一　句の一字ト思の一字ト云事一行半詞下ノ一字
　　ヲ句ノ字ト云ト後ヲ思の一字ト云行胸ノ半詞
一　其次ハ次の行ノ冠一字ヲ申也二字詞ハ
一　善悪ヲ句の一字ニテ聞事也但書ハ不云

以名筆附而必墨式往筆於當之

一 奉と云字ハ事書状一通の内に多く不可書
二字斗ハ不苦候人ハ不可書令と云字も貴
殿の方へ出る書に書ましきとて主薄に候

一 作と云字ハ何の上に不可書但何とも吉様と
下へ続け不苦

一 書状に而ハ始ゝゆるゝけゝつとちゝいた

つき色とハ緋色小井之事ニ候

一 御内書同御内書の事ハ文の御内書同御事とも云之御書文をハ御内書と云之

一 奉書とハ上意の趣を其外人か被申出と云詞也ハ仰執達如件又御披露之者也被成之様打付申者也

一 上意之趣とハ三藏より申出と御教書と云

一　組合衆ニおゐて当役所の下ニ判形致さセ候

一　帳箋一枚ツヽ上包張付

一　下しらへ公方へ申上て申渡有之

一　罷出候ハヽ出会一条之直様書付出し申事

一　公方衆御内之儀罷出御役所詰番土候ハヽ

一　其上ニて当所不入可除之

一　中次之事大略取極院内申事

一 御右筆方之の事大概御宿所書ニてとゝのひて
又お同方となりし

一 同胴廻之の事とゝのひ人ハ小分才書ニても
又は宿ニ元なりし

一 末口の事大概同胴同分之細紙寫ニ依也し

一 半紙の長さと折事一寸八分ぞろ絶し

一 半紙押年めすゝおろくと書し鍾の限とする

一 あまふれ事

一 嫁娶祝之儀状ニハ西字を認何ヶ日
挿しゑ年之意ニ候

一 弔状の事封せさるに定て済ニハ何しらす
只綿と不切者綿上包ゑてする繊何るまし
言云不て書端年を不てるし也
破文字ふし事

一　殿殿上殿中殿下との一書事ハ不限
下ゟ上之義ハ不書様の事也
紀請文書様の事
敬白　紀請文之事
一　向後者御役之先直ゟ下ゟ事
一　今度今般御役申付候間々致

一 並戸諸公事之外於隣郷内輪事

右條々於相背者、日本国中六十余州大小

神祇別而伊豆箱根之嶋大明神殊氏神

可蒙抑罰者也、仍起請文如件

天正二年五月三日　飯尾大和守　長稀 判

松山鳥吏　貞光 判

山本摂津守　久[illegible] 判

秋庭備中守殿

右此頃也其宗旨ニ付り御公儀御条目並宗旨は
三十番神之神(於)ゝ(有)又(勿論)也又三宝(荒)神之霊社之類

起請文別当不及也又宗旨の事其人之宗旨の事

事ニ付り之以ト(其)外ニ依頼之以来不致ゝ(了)附(寺)ゝ(申)

起請文其旨事ニ付り寺請(以)人(之)役(有之)数ケ(条)寺(在)

一事也此旨(相)守(申)候(ニ)付り候(寺)(本)(今)(日)(相)(極)(申)

折ゝと不及残文字のことも則ニ付而委細承候小

當殿の人ニ可申候し

猶書調ニ申

敬白

八幡大菩薩　御寶前

雄劔　一振　長光

右願者國家安全武運長久息災延命爲

祈念也然者神者依人之敬增威人者依神之

德添運忽奉仰諸願成就所仰

天正八年五月五日

侍従從五位下兼丹波守

源信成

此願之文言のことく可随筆者徒所願事ふ多く

立所と帝事出陣の時所持と歎ふハ福失ス

出行く納之所成就の時所書札とく御事とて

諸人其家也代たかふに武士之嗜に上判の端として
一命捨之当に端を指ハ定る月日を繕て名乗

着到之事

着到 天正八年
三月朔日

大久保左馬尉 松平乙と云合出乙と数多注進人之条
戊山主膳正 酒井小五郎 小牛修之料紙の端を

二日　三寸六分程積り申初而候令也候

松本勘十郎　并総勢百人と五人之内組并組頭

三日　此上何百何十人と数を不存事差引の

池田吉信守　殊更也人数の多少を能々小細に見合せ候

上村甚兵衛　先にも也

首帳之事

検使之者と徳立置候之儀令八

天正二年二月十日於信濃国境目長尾与合戦
之砌村捕首注文事
首壱　村上弥記　　桜九左討捕之證下
首壱　名不知　　松山六左衛門討捕之事
右首数何百二仰捨
凡如此之比分手負ニ至帳書据此傳

同安親状事継今ハ

松田丹後守長治様より

紀伊国長澤荘事 右先祖雖為御恩之地当代

相続之所依不慮之儀訖近年不令知行候

之旨申様之根被成御下知者不可有子細

不能左右候以御同安之状如件

応永元年二月十一日

絃縁閣譜字叙

凡此譜也以琴詞押書之表中と謂ふのとく
半ハ上包ニて上下と於上包の上に亦書
一し此譜目安の出生多一度ニ致譜目時毛
上包と紅次の詞ニ寄るもの之者時名古く
時ハ五線ニ依てたのもし半也大略目安毛
假名年ニ紀也先年某紀頭人ニ卞せしを

役人目安之文料紙ハ文字小隠レ二枚ニ続と
続之一寸端を可出事ニ寸ほと也但半紙
如此ハ右同前也

小笠原大膳大夫長時謹而言上

右子細者今度知行分被 御付候処文書之段
被出候所令紛失候 御判ハ 請取不奉存
小殿ニ御取揚被下候様ニ言上略

天正八年十二月日

名字安文敬

凡此類也紙一枚ニ調上包ハ同紙ニ書也前

云上ト計モ書へし文名字安文ニ書へし謹言

言上とも書へし口傳

小笠原大膳大夫長時 謹言

言上

書状馬具書様之事

鞍 一背 一口 轡 一口 鐙 一足 一掛 切付 一足分 力革 一具 鼻革 二筋

手綱 一具 一筋 腹帯 鞦 一具 馬衣 一枚 ちゝ子 一間 志つ子

一筋 うつぼ 二 一張 射ゆけ 行縢 馬上ゆけ 一具 法 一筋 法 二筋

法 一張とハ七筋也 一揃とハ卅筋也 鞠 一九 一顆九

尤此類之

一 舩の事 一艘二艘と書也 一疋二疋とハ不可書

請取申銀子事

合百弐拾匁　但京銀口入也

右是者就何々之為田地請取申所実正也仍

如件

年号月日　名字官判

何誰殿

当納済之事

合六百文者　何々

右請取申所実正也仍如件

年号月日　名主判

誰かし殿

当年貢綿之事

合千弐百把者　何村

右ハ御禮

年号月日　　名字書判

名字某殿

納蝋涼之事

金百疋
銭貫目　　何拾目掛

右ハ御禮

年号月日

名字書判

名字当座

九ツ迄但共前後之例歟

備後河役之事

借用中料足事

合三拾貫文者

右借用中所定之通加貫別五百文宛利足者

状迷可在辨者也若天下一同之彼儀雖有之
別而中合上分定九不可甚儀万一以諸事令
違背族者得法者知行分可令甚状相當謹可致
押以甚所不可及一言之御沙汰也仍依為御

年号月日　　名字判
　　　　　　名乗判

何誰殿

大形如此之但公家之不手して仰付申座御の事

今度従紀言何花加利之速進上奉行衆中
斗之使者令附候、尤珍重候也

将軍家之長崎奉行衆中

為御代替御祝儀御太刀一腰、鞍置御馬一疋河原毛
進上候、依之銀子五百枚被相渡候、為其如此候

七月五日　小笠原太膳大夫
長勝 判

信濃守殿

先ハ内府の様子逐一記して家督之文ニ之日ゝの

万之年月日之名代万二寸

為代始祝儀太刀一腰鹿毛馬一疋到来聞召候

目出度候也

八月十日　御判

小笠原大膳大夫とのへ

御内書俵中ニ合一通ニ而掛常のことく不封ニて
紫糸ニて包之上下ニ封字有之
右御返報中上時伊豫守殿江出候写
雑掌中遣之今度江柳営御代替之御礼御太刀
一腰御馬一疋進上之依之従柳営被遣之仍
太刀一腰馬一疋差遣之候ニ向後不別ニ而申談度候ニ

恐惶謹言

七月六日　大膳大夫

長時判

蜷川伊勢守殿

公方様為御代始之御禮御太刀一腰御馬一疋

被進上候畢然者被成

御内書以先証之旨為御禮

八月十一日　　伊勢守　貞孝判

謹上　小笠原大膳大夫殿

但右状之上書也如此之

一　信州小笠原長時ゟ京都小笠原備前守ニ示来
達て大文度候ニ御判御礼上洛之旨今様ニ
而庭果可能申入ニ上洛之間御用之段入ニ
不可有曠之ニ仍御当方一勝を被仰候云

右四ヶ条急度相守可申候

八月十四日

御局殿へつかはし　　祐盛

一書状すへての御小文の時ハ料紙の末を切わして
上包の方を短く切ハ料紙のたけより短くなし
候ハ七寸五分を切の長さとなしてす候事
其の時ハ上包の方を短く切出し又紙の事

小文の時ハちいさくとも之文字のとほり目安

にもすへし乍然此事ハ筋によるへき事

口傳

右卅一冊者雖爲秘事依御執心深

懇記進之平努々不可有外見者也

水鴎卜也 之成

横山三郎右衛門 時連

早川茂右衛門 為逢

原田傳内 元陳

村田小平太

寶暦十二壬午年
十月十日

信令

津村作兵衛殿